

1 卷の一

雑詠日記

徐山猿声

卷の一

一九八八年

市井一人

一年ばかり日記を中断していたが、一九八八年元旦を期して再開した。今年からは雑然とだが様々のことを多く記すように心がけている。永井荷風の日記に習って俳句の真似事をしているうち、短歌なども出来てきたので、折々ふと浮かんだ詩情や心をよぎった言葉を集めてみた。季語を知らぬ者が句を発し、歌論を読まぬ者が五七の言葉を連ね、平仄や韻の分からぬ者が漢字を並べるのである。それは、日常の生活に押し流されることへのささやかな抵抗でもある。

後記（二〇一〇年）

雑詠の記録を始めたばかりの二三年、実態はまだ習作に過ぎず、選ぼうとして残すほどの句はあまりにも少なかった。甘い選句だけれども、一人の人間の過ごした季節を辿ることができ、一年分がなんとか冊子になる程度に残した。

戊辰元旦

今年の我が年賀状の文言。

東 天 仰 青 龍

賀 新 年 吉 祥

願 貴 家 清 勝

正月二日

年末来の風邪の養生のため、床の中で荷風『断腸亭日乗』を読む。

ふる里に鼻をすすつて寝正月

三月四日

この冬初めての雪化粧

置く雪が朝日に融けて梅残る

(白梅)

四月十九日

風鳴つて桜の花は舞い乱れ行方も知れず空の霞へ

(黄砂)

四月二十一日

潮騒が飽かずに語る春の夢

高殿に渚を見れば寄す波の弓なりの跡はるかに霞む

(虹の松原)

息切らし山路を行けば霧こめて木立の影の白い野いちご

五月十日

正月に倒れて以来意識無く病床にあつた伯父が死去。

生花並ぶ堂の内なる燭ゆらぐ今は亡き人息永く止む

五月二十一日

なでしこの花のつぼみの開く朝小さきものにいのちありけり

六月七日

考えにあぐねて時の過ぎるまま人にもものを言い足らずおる

六月九日

天と地を駆ける者

とりわけて 人の世を急ぐもの

時よ、おまえはしばし休むことも知らぬ

人こそは振り返りさすらう者

失ったおまえを求めて

だが時よ、人はついに知る

おまえをとらえる機会は

今この瞬間にしかないことを

七月十九日

隣国の国の花なる無窮花咲く夏の今日も酷暑になるか

七月二十三日

バスで県立美術館へ、「アメリカの時代展」。

焼ける日や日傘の下に暑き顔

七月三十日

某氏別荘へ、同行四人。一時心遊ぶ。人は広大な空間と永遠の時間の一点に居る。

たたずめば海原広し夏の午後船影行かず時止まるごと

八月十日

友人一家と萩へ。松陰神社など訪れる。松陰の日記、文書、墨蹟を見る。

直情に猛き行い為した人、文読むことも数多かりし

八月十三日

朝、父が血尿を出し、重大な病氣であることが判明。

孫叱る老父の小言なお悲し重い病に日は改まる

八月二十四日

診察を明日に控えた父が言う法師蟬来ておもしろき哉

九月五日

明け方前に一度目覚めて例の高ぶった気分のような不快。

秋あかね霧立ち上るかの山へ飛びて伝えよ熱き心を

九月九日

父の手術が行なわれた。

病室の窓越しに見る園児らがはだかで遊ぶ楽しい姿

九月十日

初秋夜気冷且快

虫声切似弦楽奏

宣哉古人震琴線

人藏胸中万化想

九月十四日

美術館にホログラフイを見る。幻覚の世界。休耕田一面にコスモスが咲き乱れ、紋白蝶が飛んでいる。この花をなぜ *cosmos* と呼ぶのだろう。蝶は莊子の夢の故事を連想させ、パスカルの言うように、宇宙に慰戯をなす人間を思わせる。そして、今日の私を・・・

コスモスに戯れる蝶我なるか

九月十八日

蟬ひとつ空に掲げた蜘蛛の網

九月二十七日

老父発熱不機嫌つのる。夜八時過ぎ病院へ。山陵に十七夜の月が美しい。

無窮なる天球われを呑みつくす

十月十三日

木星とすばるの光る東へ夜寒の道を一人そぞろに

十月二十二日

わが庭で今は主役の石露の花

十一月七日

時過ぎぬ病院の日々倦み疲れ喜怒去りがたき老 patient

十一月十日

待ち望む退院の日を告げられて老父の心はや故郷に

十一月十二日

父、七十六日ぶりに退院。

退院で小春日和の父の声盆栽の楓赤きを褒める

十一月十七日

初しぐれ。咲き誇っていたコスモスを刈込んだ広い畑の真ん中に、蝶に代わって孤独な犬がうずくまっている。

秋老いて畑に伏した白き犬

十一月二十日

大宰府光明寺の見事な紅葉を見、天満宮で残菊の宴を見物する。四人の官女による舞の奉納もあった。昨日まで『紫式部日記』を読んでいたの色彩感覚など王朝の美意識を思い浮かべた。

舞姫が残菊愛でて舞う宴小春日射してはなやいであり

残菊に歌詠むみやび尽くせぬは大宮人の心枯るれば

十二月二十三日

石段に時雨と紅葉落ちる秋

十一月二十六日

雪まじる風に追われて雀二羽

十二月六日

放射冷却の朝、年配の婦人が水たまりの氷の薄片を見つめていた。

うれしやかな光を結ぶ初氷

十二月十日

窓際の机上に写る冬空を旅客機一つ高く飛び行く

十二月十一日

若き日の手紙を燃やす庭の隅ゆらめく炎ぼんやりと見る

十二月十五日

夜、年賀状の宛名書き、数度雷鳴を聞く。いつの間にか昨冬にもないほどの積雪。二度雨戸を開け庭の雪を楽しむ。

雷が思いもかけずくれた雪

十二月十七日

若き人華燭を灯す冬の夜の船出の港我も旅人

十二月二十五日

ジョアン・ミロ展へ。晩年のその作品は、「生きていること、息をしていて、前へ進む場所を残している」ことの証だと。

黒々と太い曲線、色を加え、女と鳥の息吹が潜む

絵画がこのような抽象に進んでいるとき、詩も定型を離れ生きた口語でなければ、現代を語り尽くせないだろう。俳句・短歌は安易な道。だが、詩人でない身にはそれ以上のことができない。

十二月二十七日

しめ飾り運ぶ姿や年が往く

十二月二十九日

水底に兵眠る壇の浦冬の陽ゆらり潮にたゆとう

十二月三十一日

除夜の鐘数を尽くせぬ煩悩を胸に沈めて年を重ねる

一九八九年正月
徐山亭 謹製

「東城に春を尋ぬ」

白樂天

老色 日に面に上り

歡情 日に心を去る

今 既に昔に如かず

後 当に今に如かざるべし

今なお甚だしくは衰えず

事毎に力任うべし

花時なお出ずるを愛し

酒後なおよく吟ず

ただ恐る かくの如きの興も

また日に随つて消沈せんことを

東城の春 老いんと欲す

勉強して一たび来尋す

